魂を育てる(10):「神の流儀」

メッセージノート（2024.4.21）

創世記 39 章 *[1] さて、イシュマエル人の隊商に売り飛ばされたヨセフに話を戻しましょう。彼はエジプトに着くと、エジプト王ファラオに仕える役人の一人、ポティファルに買い取られました。[2] ヨセフはこの主人となった人の家の仕事をさせられましたが、いつも主が助けてくださるので、何をしてもうまくいきました。[3] ポティファルの目に、主がヨセフに特別よくしておられることは明らかでした。[4] ヨセフは主人の気に入り、家の管理と業務のすべてを任されるようになったのです。[5] すると、ポティファルの家は祝福され、万事がスムーズに運びました。収穫も、羊の群れも増える一方でした。[6] 喜んだポティファルは、全財産の管理をヨセフに任せることにしました。ヨセフさえいれば、何の心配もありません。しかも、ヨセフはたいへん美青年でした。[7] そこで、困ったことが持ち上がりました。事もあろうに、ポティファルの妻がヨセフに目をつけて、彼を誘惑するようになったのです。[8] ヨセフはそれを拒みました。「ご主人は家のこといっさいを私にお任せになりました。[9] 家では、私のすることに、決して口出ししたり、指図したりなさいません。あなた以外は何でも私の自由にさせてくださいます。これほどまでにしていただいて、どうして、そんな大それたことができましょう。ご主人ばかりか、神様にまで背くことなどできません。」[10] それでも彼女はあきらめません。毎日しつこく言い寄り、ヨセフが相手にしないと何とかして気を引こうとやっきになりました。[11] そんなある日のこと、ヨセフは家で仕事をしていました。たまたま周囲にはだれもいません。この時とばかり彼女がやって来て、ヨセフの袖をつかみました。[12-13]「ちょっと私の部屋に来ておくれ。」とんでもないと、ヨセフがその手を振り払って逃げようとしたところ、上着が脱げてしまいました。しかし彼はそのまま家の外へ逃げ出しました。彼女はそのうしろ姿を、残された上着を手にしたままじっと見つめていましたが、[14-15] 突然叫び声を上げました。何事が起こったのかと、男たちが駆けつけると、彼女が興奮して泣いています。「私の主人が、あんなヘブル人（イスラエル人）の奴隷なんか連れて来るからいけないのよ。おかげで危ない目に会うところだったわ。とてもひどいことをしようとしたので、私、大声で叫んでやったわ。そうしたら、上着を置いたままあわてて逃げ出したのよ。」[16] 彼女はヨセフの上着を手もとに置き、その夜、夫が家に帰ると、[17] 昼間の出来事を話しました。「うちで仕事をさせている、あのヘブル人の奴隷ですが、今日私にひどいことをしようとしたのです。[18] 大声を上げたから助かったものの、そうでなければ、どうなっていたかわかりませんわ。あの男ったら、あわてて上着を残したまま逃げ出して……。これがその上着です。」[19] 主人がかんかんに怒ったのは、言うまでもありません。[20] 真相をよく調べもせず、すぐさまヨセフを捕らえ、王の囚人が入れられる監獄に放り込みました。[21] しかし、主は監獄の中でさえヨセフとともにいて、何事にも心にかけてくださったので、ヨセフは看守長にとても気に入られました。[22] この男なら大丈夫と見抜いた看守長は、やがてすべての囚人の面倒を見るよう、監獄内の管理をいっさいヨセフに任せることにしました。[23] それからというもの、ヨセフが取り仕切ったので、看守長は何の心配もなくなりました。主がヨセフとともにおられるので、彼は何をしてもスムーズに事が運びました。（リビングバイブル）*

1.　神の人の育て方

神は、子どもたちの教育をある期間、親に委ねられるが、その時期は短く、また親の間違えや好ましくない環境といった一切の状況を考慮しながら神の目的に沿って養育しているので、神には不測の出来事というものははない。

ヘブル 12:10 *肉親の父親は、ほんの短い間だけ、それも、限られた知識に基づいて私たちを訓練します。ところが神は、私たちの最善を願って、神のきよさを共有させようと訓練をしてくださるのです。（リビングバイブル）*

ヨセフの場合　I

- 機能不全の家族の中で育ったために、多くの精神的負の遺産を受け継ぐとともに、溺愛されて育ったため、自己中心性と未熟さを抱えていた。
- ある意味で、あのまま家にいても人間としての成長が期待できなかったヨセフに神は、強制的に一人旅をさせ、神との個人的関係を構築させた（イサクは母親との別離という形で）。

➢ あなたはこれまでどんな訓練の旅を歩まされてきただろうか？そこにはどんな意味があっただろうか？

2.　神の訓練は完璧

私たちには分からなくても、神には私たちのための最善の計画があり、その計画は状況がどんなに悪化しても変わることなく、同時に神はいつも共にいて必要な助けを提供しつつ私たちを育てていかれる。そして、苦悩は賛美へと変えられる。

ヨセフの場合 II

- 状況は、次から次へと悪化の一途を辿り、最悪となる。兄たちの裏切り、奴隷としてエジプトへ、冤罪で性的犯罪者とされ無期懲役で牢獄へぶち込まれる。その間、淡い希望が見えたかと思うと裏切られ、絶望の淵に追いやられた（ポティファルの家での重用や側近の夢の解き明かし）。
- 何度も期待が裏切られると（忘れられ、利用されるだけの存在）、人は孤独感にさいなまれ、心は病んでいく（回避性パーソナリティ障害のような）。無慈悲な兄たち、ポティファルの妻、側近の扱いは、孤独感を増長させたろう。
- どうやってヨセフはこの苦悩を降り超えたのか？聖書は*「主が共にいてくださったので」*という。それは、ヨセフが厳しい状況の中で、神に頼ることを学んだということ。どんな時にでも一緒にいてくださる神を見出したのだ。
- しかし、どうしてこんな短期間で、しかも若いのに神との信頼関係を構築することができたのか：もしその関係を確立していなければ、彼は壊れていただろう。神との関係は、単に時間と正比例しない。

➢ ヨセフにはヨセフの、あなたにはあなたの神と出会う道がある。あなたの人生にはどんな神の指の跡があったか？

3.　神の配慮と詳細な計画

神は、ヨセフを将来の宰相に立て、世界を飢饉から救うばかりでなく、彼の家族を救い、さらには家族との和解をも計画しておられたが、話はそれで終わらない。エジプトの奴隷生活からの解放という歴史的奇跡が、人類を罪の奴隷から解放する救い主イエス・キリスト（過越の小羊）による救済という聖書の中心メッセージのモチーフを提供するものでもあった。

ヨセフの場合 III

- ポティファルという王の側近の家の奴隷となったことは、ヨセフが初めて触れたエジプトであった。17歳という若さゆえ、多くのことを吸収することができた。文化、習慣、言語、考え方など、当時のエリート家族から多くのことを身に付けることができた。それは、将来王宮で働くための大切な備えとなった。
- ポティファルの「家の仕事」の「家」とは、家の中という意味で、肉体労働ではなかった。そこにも神の導きがあった。言語の習得は最初の半年間が鍵であり、17 歳は新しい言語をバイリンガルで身につける最適な時期である。
- 冤罪で政治犯の入る牢に叩き込まれるが、そこで彼は、エジプトの有力な政治家たちから普通は入手できない多くの重要情報や国の抱える問題（政敵の立場）などを聞くことになる。それは、政治家になる大切な学習となった。
- 何よりも牢獄において、理不尽な思いをしている多くの人々にも出会った。正義が行われていない現状を目撃し、弱者への思いやりや謙虚さを身に付けていくことにもなった。

➢ 神は様々な学習機会を用意しておられるが、あなたにはどんな学習経験があっただろうか？　何を学んだか？

まとめ

神のなさることに無駄はまったくない。どんな状況の中でも、主は生きて働いておられ、最善をなしておられる。それゆえ今おかれている辛い状況にあっても、諦めないで主を信頼し続ける。

1. あなたの受けてきた家庭教育の欠けを主はどのように補い、あなたを成長させてこられただろうか？
2. あなたの人生において、特に苦しかった時に、主はどのように共にいて、あなたを励ましてくださっただろうか？
3. 神のなさることはどれ一つ取っても無駄はない。経験してきたことの中にどんな神の意図を見ることができるか？